

生活再現展示の思考

青 木 俊 也

AOKI Toshiya

(COE教員)

I くらしを展示すること

1 展示された「昔のくらし」

現在のわたしたちにとって昔とは、どのような時代なのであろうか。歴史系博物館における昔には旧石器時代から始まる人類史の時間幅があるなかで、昭和30年代という1960年を中心にした10年間は、懐かしさの対象として様々な表現の媒体となり、社会的な広がりを持つノスタルジアとなって久しい。それらの動向と呼応するように歴史系博物館においても、戦後になって広く使われ始めた家電製品などが戦後生活資料として収集の対象となり、15年程前より戦後生活を再現した展示がつくられるようになってきた。戦後生活は、確実に博物館展示において、「昔のくらし」として表現されるようになってきたのである。

さらに、小学生向け、小学校4年生の社会科のカリキュラムに関連させた展示、いわゆる子ども向け「昔のくらし」展は、各地域の歴史系博物館において開催されて十数年が経過した。これらの展示は今日では失われてしまった生活の知恵や技を生かしていたくらしを出発点に、身近な生活の歴史を対象にしている。子どもたちにとって、戦前の暮らしは、地域の古老や祖父母世代が経験した生活であり、戦後の暮らしは父母世代が経験した生活と想定している。そのような想定のもとに、教科書のなかの地域の古老や家族などの身近な大人から生活経験を教えてもらう場面の記述を、展示室において子どもたちが同行の家族から昔の時代の生活経験の話を聞く場面に置き換えて、展示室が子どもを中心に異なる世代の人々が交流する場になることを意図している。

大まかにいうことが許されれば、これらの展示における「昔のくらし」の時代として、開催され始めた当初は戦前を設定したものが多かったのに対して、徐々に戦後のくらしもそのなかに含まれ、その比重を増やしている傾向にあるといえる。この「昔のくらし」展が開催されてから、子どもにとっての身近な大人たちの生活経験の推移が、戦前のくらしから、茶の間に白黒テレビが置かれた姿に象徴的に示された戦後のくらしへと「昔のくらし」の中身の変化を促していると考えられる。

それでは、博物館において、戦後生活より前のテレビが置かれていなかった「昔のくらし」とは、どのような時代の生活だろうか。

2 生活を再現すること

博物館展示として生活を再現することは、歴史系博物館の展示に限らず文学館の作家の書斎を再現するなど、一般的にひろく行われている展示形態である。この文で使用する「生活再現展示」という

用語は「ある時点の生活空間をつくり、くらしに使用する生活資料を配置して、その生活を再現すること」を意味する言葉として使用する。さらに、再現した生活空間に人形を配したり、芝居のように人が演ずることも「生活再現展示」に含むこととしたい。これまで、この種の展示に対して「生活復原」と記される場合もあった。生活が人の活動によって成り立つ、動的な状態であることを示すためには、再現という言葉がふさわしいと考えている。また、一方で復原という言葉は、「家屋を復原する」「生活環境を復原する」といった、そこに人の活動を直接に示さない静的な状態に対する言葉として使用している。この文において「民家の生活再現展示」と記すときには、主屋内の生活だけでなく屋敷地及び付属屋における生活も含めたものとして使用している⁽¹⁾。

「昔のくらし」を再現した展示における具体例の一つとして、野外博物館における民家の生活再現展示を挙げることができよう。「野外民家博物館の生活再現展示」と記すときには、上記の民家、屋敷地の他に耕地の生産活動や、辻切りなどのムラ境の行事なども含めたムラやマチにおける生活を再現していることを示している。

その意味でこの「生活再現展示」という言葉は、野外民家博物館などの博物館展示全体のなかでくらしにおける人の活動に関わる展示を指す、大づかみな意味に使用している。例えば、竈周辺の火消し壺や、火吹き竹などの民具を配置すること自体が、それらを使って竈で火を焚くことの生活を伝えようとしている展示であり、実際に竈で火吹き竹を使って飯を炊くなどの実演をすることはその展示をさらに積極的に表現したものであると捉えている。この文は、簡潔にいうと野外民家博物館において、生活を積極的に表現しているかどうかを問いかけることをテーマにしており、実際の展示を構成するための展示方法を検討することを意図していない。そのために、生活再現展示という言葉に集約して、くらしの展示全体を表している⁽³⁾。

Ⅱ 民家建築博物館としての野外民家博物館

1 野外民家博物館の景観



写真1 兵士の家

この写真(写真1)は、スウェーデンのストックホルムにある1891年に設立された世界最初の野外民家博物館であるスカンセンで展示されている兵士の家のくらしを写している。スカンセンでは移築した伝統的な家屋を中心に、その屋敷、耕地、家畜などの生活環境と、そこでの生活者に扮したスタッフの活動を混じえた伝統的な生活の姿を再現し、生活の場面のなかで民家を見せている。スカンセンの生活再現展示は、リビングヒストリーミュージアムとして、野外民家博物館の展示手法の典型となっており、大きな影響を与えていると指摘されている(杉本 1980)。

スウェーデンの語学教師であったハツエリス Arthur. Hazelius は、19世紀に始まった産業革命によって伝統的な農村の生活文化が失われていくことを危惧し、その生活資料を収集した。その成果がスカンジナビア民俗学コレクションになり、北方民族博物館の礎となった。さらに、ハツエリスは、この博物館の近隣に野外民家博物館スカンセンをつくった(杉本 1980)。

この国の本格的な野外民家博物館は、戦前において紀元二千六百年記念事業として日本民族博物館

の野外展観が計画され、今和次郎によってスカンセンを模した鳥瞰図が作成されたが、このときには実現せず、戦後になり、地方自治体などによって実現されたことが知られている。現在、国内40数館を数える野外民家博物館⁽⁴⁾のなかで、この文が考察の対象とするのは村落や伝統的な町場の民家を移築した野外民家博物館⁽⁵⁾である。これらのなかで先のスカンセンのような現実感のある生活再現展示を実現している博物館は少ないといわざるを得ない。このことには野外民家博物館の存立理由ともいうべき根本的な部分に違いが内在されていると私は考える。

早くより、生きた博物館を表明し、その姿の実現に努めた飛騨民俗村などによる先駆的な博物館活動が知られているが、実際規模の家屋敷、つまり主屋、付属屋を配置した屋敷地、さらに周辺の耕地を揃えた生活環境を再現した野外民家博物館は、1986年に開館した千葉県立房総のむらの登場まで待たなければならなかったと考えている。

それまでの野外民家博物館の一般的景観としては、屋敷地全体ではなく主屋単独で移築している傾向がある。屋敷地などの生活環境を重視する理念を表明していても、限られた敷地において生活環境の整備を行っていても、また、移築民家位置する散村・集村の屋敷地などの移築する民家の立地状況に違いがあることを踏まえていても、やはりこの傾向が大きかったのは確かであろう。それでは、なぜ、主屋が単独で移築され、屋敷地全体は復原されなかったのだろうか。もちろん、各博物館の敷地面積、民家移築の予算規模などの経済的な要因による影響が大きいと考えられる。それぞれの博物館、民家毎の状況を個別に検討しなければ、明確な回答は導き出せないだろう。しかし、その前提を探る基礎的な作業、いわば民家の生活再現展示のこれまでの状況を探る手始めとして、各博物館の展示に共通して影響を与えた民家研究面における志向ともいえるべき事柄について、実際の野外民家博物館の具体例を通して考えてみたい。

2 日本民家集落博物館における民家の移築

戦後はじめての本格的な野外民家博物館である日本民家集落博物館は、1956年に飛騨白川の合掌造りの民家が豊中市に移築され、豊中市立民俗館となったことを契機として、その後「豊中市立民俗館を発展解消して、スカンセン・ミュージアムに匹敵する、東洋一の野外博物館を建設しよう」（鳥越1974：12）と1960年に開館した。約1万1千坪の敷地に日本各地から移築復原した貴重な民家は水車を含めて13件にのぼる。

日本民家集落博物館の開館に尽力した鳥越憲三郎は、建築史学による復原的研究方法による民家の収集を推し進めた状況について「その村で約五十棟くらいは見てまわり、その地方での最高のものを選んだ。村々の家々を調査するのは、他にも大きな理由がある。五十年以上も経た家は、必ずどこかに手を入れて改造している。下屋を出したり、柱の位置を変えたりして、建築当初のものに復元するには、かなり多くの家を見てまわってはじめて分かる」（同前：13）と述べている。このことから移築する民家に対して、建築当初に復原することを前提にその集落の民家の観察調査を行っていることがわかる。また、ここで記された「最高のもの」という基準は、次の節で述べる歴史的に価値の高い建築物を指していることはいうまでもない。

例えば、この博物館の長野県秋山郷の民家は、太田博太郎の指導による調査成果である『秋山郷の民家』をもとに、山田芳法氏宅が移築されている。1959年8月13日から16日までの4日間にわたって

調査した12軒の民家の建築様式の比較によって、相対的年代差を割り出す編年作業に基づき山田宅を最も古い建築様式を残す民家と推定したことに加え、山田宅が取り壊す事態となっていることに対して、日本民家集落博物館に解体移築し、復元的調査を徹底的に行っている。先の報告では『『にわ』が土間であることはもちろんだが、古いものでは『なかのま』『ざしき』『ねま』など、普通板敷あるいは畳敷となるところも、すべて土間となる』と記している（長野県教育委員会 1962：3-7）。この秋山郷の民家を移築した経験を通して、鳥越は「これまでの民俗学で調査していた民家研究の甘さを、つくづくと知らされた。間取や柱をスケッチして報告していた民俗学的調査が、如何に危険きわまるものであるかを知ったのである。例えば秋山の民家などは、復元すると床がいっさいなくなって土間になってしまった」（鳥越 1974：13）と述べ、現状把握による民俗学的な民家調査を否定している。

秋山郷の民家で土座住まいがおこなわれていたことを明らかにした建築当初への復原方法は、戦後新たに考え出されたものであった。

3 復元的民家研究方法の確立と野外民家博物館への移築保存

この民家の研究方法が考え出された経緯を、戦前から戦後にかけての民家研究の推移を明らかにした大野敏の研究成果などにしたがって確かめてみたい（大野 2003：121-134）（大河 1966：1-4）（太田 1966：23-29）。

大野によると、戦前と戦後の間には、民家の研究方法の大きな変化があるという。大正期から始まった民俗学などが中心となった民家研究は「民家の現状形態に注目した採集を中心にしており、これが戦前までの民家研究の主体であった」という。

この民家の現状を重視した研究方法は、戦後になって民家研究に参加した建築史家によって、その歴史が明らかにできないと批判された。戦後の民家研究を主導した太田博太郎は、建築史家として民家を研究しようとした動機について「戦後、庶民生活の歴史をもっと明らかにしたいという願いが、澎湃として起こった。建築史の面でも、庶民住宅の歴史を研究しようという気持ちは、この流れのうちの一つで」あったとしている。そして「戦前における民家の調査が現状の記録と、その形式分類に止まって、歴史的研究にまで進まなかった」と評価し、民家を「歴史の史料として使うためには、当然、当初の姿に復さなくてはならない」と述べている⁽⁶⁾。

その反省を踏まえ、民家の歴史的推移を明らかにしようとした戦後の民家研究において、各地の古い建築様式を残している民家を捜してその特性を明らかにすること、保存することが求められた。そのことを目的として、古い建築様式の間取りや構造を捉えるために、部材に残された痕跡や文献資料を手がかりとして、民家を建築当初の姿に復原する「復元的研究方法」が昭和30年代までに確立された、とされる。その成果として日本建築学会民家小委員会によって1962年に「民家調査の基準Ⅰ 復元的調査および編年(案)」が作成され、民家研究の基準となり、民家の文化財指定、国の重要文化財の指定が進められた。

そして、文化財指定とともに古い建築様式の民家を保存する手段となったのが野外民家博物館への移築であった。その2つが合わさることで、国指定を始めとする何らかの文化財の指定を受けている移築民家を多く展示する野外民家博物館がつくられていったと考えられる。また、野外民家博物館へ移築するための民家の建築部材の解体が、復元的調査を徹底的に行う機会となったとされる。つまり、

戦後に確立された民家の復元的研究方法は、文化財指定と野外民家博物館への移築という2つの民家保存の方策と密接に関連していたと考えられる。

そして、歴史的な民家を保存することを使命とした先の日本民家集落博物館などに、この国の民家建築の歴史を示す各地の特徴的な民家が移築されたのである。この建築当初に復原された状態が、野外民家博物館に移築された民家の一般的な姿であったことが、調査されている⁽⁷⁾。

先の野外民家博物館の景観で述べた主屋を単独で移築した姿は、その敷地の制約が最も大きな要因となったと考えられる。しかし、この戦後の新しい民家研究の潮流がつくられていった結果、後に詳述する戦前の野外民家博物館の構想と深く関わった今和次郎の民家研究の視点も半ば閉ざされることになった。実際の簡易な建物である小屋などを含めた民家が建てられた屋敷地の面積を割くことよりは、民家建築物としての主屋を優先させて数多く保存することを重視した結果であったと、私は推測している。そのことは、民家建築物の保存を第一のテーマにした博物館であれば当然のことであり、民家建築物を保存した野外民家博物館の姿であった。

4 建築当初に復原された民家における生活再現展示

この節で考える川崎市立日本民家園（以降は日本民家園と表記）は、東日本の代表的な民家をはじめ水車小屋・船頭小屋・高倉・農村歌舞伎舞台など25棟を移築した野外民家博物館である。1967年4月の開館当初の展示は3棟の民家であったが、東日本の主要な民家、西日本の代表的な重要文化財クラスの民家を、年間3棟ほど、15年間で40～50棟を移築する計画であったとされる。

園内は、宿場（4棟）・信越の村（6棟）・関東の村（4棟）・神奈川の村（6棟）・芸能の森（1棟）・東北の村（2棟）とその他2カ所の区域に、地域的特性を生かして民家を有機的に配置し、植生にも配慮して環境をたくみに整備している。しかし、敷地面積の制限によって各民家の屋敷は主屋を優先した配置で、付属屋を備えた屋敷地までは復原されず、田畑などの農村の景観も十分に表現されていないと考えられる。ただし、その後、日本民家園では本館を設立し、全国の様々な立地条件の民家の屋敷取りの模型を展示し、生活の表現を補っている。

日本民家園に移築した民家は、日本民家集落博物館と同様に復元的民家調査によって増改築の経緯をたどって建築当初の姿を明らかにし、原則としてその姿に復原しているとされる（川崎市立日本民家園 1993；大野 2001：59－60）⁽⁸⁾。

〈民家の生活再現展示〉 日本民家園の開館時より民家の生活を再現し、民具に関する実務を担当した学芸員の小坂広志は、民家の生活再現について、以下の通りに記している。「日本民家園の設立主旨は、民家を移築・復元し、保存することである。そのためこの博物館の性格は、その主体が民家という建造物にあるということである。当初の日本民家園の建設計画書には、民家の内外へ、どのようにして展示するかということは記されていなかった。—(中略)— 日本民家園の性格は、民家という建造物を主体にしていることである。そのため、ここにおける民具の展示は、まず民家内部の構造の観察や、美観の鑑賞に支障をきたさないような方法をとることであった」と（小坂 1974：3－4）⁽⁹⁾。また、初代園長の古江亮仁はそのことについて同じ主旨で以下の通りに記している。「一棟の民家の限られた面積にあれこれと陳列していくと、どうしても過剰になる傾向がある。すると建物内部の構造の観察や美観の鑑賞に支障をきたすとともに、民家そのものの観察もさまたげ、共倒れ両損の結果となる。

そこで、民家内の民具の陳列は実際生活の場より控えめの六、七分程度にとどめるようにしている」と（古江 1974：6）。つまり、建築物としての民家を主に、生活表現としての民具の展示を補助的に位置付けている方針であったことがわかる。そして、小坂によれば民家における民具の展示の実務においても、民家の美の鑑賞を邪魔するような民具の展示、例えば、簀をかけて土間の壁の柱とヌキが簀にかくれてしまうような状態に展示することはできなかったという⁽¹⁰⁾。

小坂は民家の解体移築に伴って、移築民家と周辺地域から民具、生活資料を1日から3日間ほどで収集し、現場で収集資料に番号を打って整理した。そして、それらは解体した民家の部材と共にトラックで日本民家園に運んだという。また、民具収集に関する考察において、移築民家における民具の配置場所などや周辺地域の民俗調査に基づいた基礎データを作成し、そして展示計画を立て民具を収集するという方法を提示している。そのなかで移築民家の復原の状態を把握する必要性を以下のように記している。「その古民家は当初の姿に復原されるのか、それとも第2次的な復原形態をとるのか、あるいは移築前のすがたのまま復原されるのか、というようなことを明確に把握する必要があるのである。特に、その古民家が創建当初の姿に復原される場合、その間取りや柱間装置は、大幅な現状変更をもたらす可能性をもっている。そのため、せっかく苦心して収集してきた民具も、それが移築前の姿のために、展示できなくなったというようなことも起こりうるのである」（小坂 1972：14-15）。そのような展示方法において、移築・復原された民家の建築的側面を優先的に展示した状況で、近世の民家には、近世につくられ、使われたと考えられる民具を展示すべきで近代の民具を展示すべきでない、言いかえれば民家の復原された状態を「場違いな」民具でこわしてはいけないと配慮して展示したと語られている。

また、小坂は日本民家園の実務経験をもとに、民家における民具の展示方法を提示している（小坂 1974：1-2）。そのなかで「資料館的展示方法⁽¹¹⁾」と「生活復原展示法」という2つの分類を行っている。「生活復原展示法」は「民具を民家の生活空間部分に配し、その民家の生活を民具によって復原する方法」である。それぞれに付随した展示法として「一般展示法」「テーマ展示法」「実演展示法」という3つの分類を行っている。

実際に最初に採用された方法は「生活復原展示法」のなかの日常の生活を表した一般展示であった。そして、第二段階として生活の焦点を絞るためにテーマを設定したテーマ展示として、特定の民家で小正月・雛祭・五月節句・うら盆などの年中行事を月毎に展示することになったとされる。さらに、第三段階として民具の実演という動きの中で展示していく実演展示法として、民具製作実演会を開催している。

以上のように、日本民家園では建築当初に復原された民家における生活再現を、日常生活、年中行事、民具製作というように段階を追って実生活に近づけている。先の日本民家集落博物館における復原された民家の生活再現展示に対して、杉本尚次が「精密な復元・編年を基礎とした復元家屋の構造を見せるのに支障のないようにその家、またはその地方で使われた生活用具、民具をもともと置かれた場所に置いた」（杉本 2002：316）と記すのも、小坂が述べる日本民家園における「生活復原展示」に近い状態を示している。

日本民家園のように計画的に民具を展示し生活を再現することが、多くの野外民家博物館で一般的におこなわれていたとは思えない。民家と民具の展示を結びつけず、資料分類した多数の民具を展示

したりする例があったなかで、この博物館の展示は調査研究の成果に基いた展示、結びついた展示であった。

Ⅲ 民俗博物館としての野外民家博物館

1 復元的民家研究への批判

この建築史による建築当初に復原した民家に対して、民俗学研究者を中心に批判が表明された⁽¹²⁾。そのなかで最も厳しい批判を加えたのは、竹内芳太郎であった。竹内は「民家非建造物私観」において、建築史による民家研究に対して、一般庶民の住宅でなく「上層民家」を多く対象にしていることに疑義を表明している（竹内 1975：6）。先述の太田博太郎が唱えた庶民住宅研究などの対象への批判であったと理解される。

そのうえで、民家が「生活と共存するもので、本質的に住む人の生活のあり方を反映し、具象化したものである」という視点から以下の批判を加えている。民家研究の「重点が編年と復原に絞られているような気がする」と述べ、民家を推定した復原の状態に戻すことに対して「もし復原を、研究上絶対に必要とするならば、究明された創建当初の姿を、模型なり想定図なりで示しておけばよい。もともと推定、しかもそれは現状では限られた研究者の、いわば独断で行われている場合が多いので、彼の推測がいつ崩れるかも知れない」（同前：6-7）と、その問題点を指摘している。そして民家の創建から時代による増改築の過程を「生活史の裏腹をなす表現として」、その重視を訴えている。

また、民家として主屋だけに偏重して研究、指定保存の対象としていることを「民家とはいっても、これもほとんど母家に限られている点に疑念をもつ。農家であれば、母家だけでは生活はできない。畜舎、堆肥舎、作業場その他もろもろの建物が組になってこそ生活空間が形成されるのである。いわば屋敷とそこにあるすべての生活施設をこそ対象として研究、保存の対象とすべき」と批判している（同前：8）。その意味で先の主屋を優先した野外民家博物館の状況は、特定した民家である主屋建築を保存する措置として野外民家博物館に移築された結果であり、屋敷地全体の生活環境、簡易な建築物である付属屋は研究対象として重視してこなかった結果、必然的に導かれたものといえよう。

川添登も同様に「民家は長い年月のなかで増改築をくりかえし、それ自身が生活史、建築史の変遷を語る貴重な資料である。しかしそれでは『美的鑑賞』の対象にはならないと『建築史研究』の材料にされ、建設当初のもっとも古い形へと復原される。このこと自体、遺物、遺跡の破壊に等しい。民家は文献資料も乏しく、正しく復原することは所詮無理」であり、「この事態を憂慮した竹内芳太郎は、民家は文化財ではなく、民俗資料として現状保存すべきだと主張された」と述べている（川添 1989：217-218）。

2 民俗博物館としての野外民家博物館の構想

この建築史による野外民家博物館に寄せられた批判の根拠となったのは、北欧の野外民家博物館であった。そして、その実現となったはずであった野外民家博物館の構想について、丸山泰明は民俗展示の理想のあり方として主張した民俗研究者の見解などを通して明らかにしている（丸山 2006）。そのなかで「ヨーロッパの民俗・民族博物館」と題する坪井洋文・杉本尚次・河岡武春による対談を紹介

介している（坪井ほか 1974）。

そのなかで河岡武春は、フリーランドムセーを見て「民俗博物館のあるべき姿はこれだ。」と感じ、紀元二千六百年記念事業として計画された日本民族博物館の「野外展観」を指して、「そういう野外博物館的な民族博物館ができなかったということは、今考えてみますと、やはり、非常に大きなマイナスであったと思うわけです」と述べ、「民族衣装をつけた人のする、いろいろな実演がありますけれども、とにかく、より生きた形で博物館が運営されていることを目の当り見ましてから、これこそ一番の原点ではないかと思いました。そういう意味では、日本の場合、たいへんにおくれていますけれども、その原点に返って考えなければならないと思いました」（同前：10）と、野外民家博物館において実演などを交えた生活再現展示がこの国でなされていないことを述べている。この指摘は、展示室内のいわゆる民俗展示、民具展示などに向けられものであるとともに、先の建築博物館的な野外民家博物館の状況に対するものとも考えられる。そして、計画で終わった野外民家博物館施設に民俗博物館の理想を見いだしている。

それでは、先に述べた戦前において、実現しなかった日本民族博物館の野外展観は、どのような野外民家博物館として計画されたのだろうか。2002年10月に横浜市歴史博物館において開催された特別展「くらしを集める くらしを探る Attic Museum 屋根裏の博物館―実業家澁澤敬三が育てた民の学問―」で、先述の日本民族博物館の「野外展観」が計画された経緯が展示され（横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002）、またその詳細が刈田均によって明らかにされている（刈田 2003）。これらの研究成果によると、日本の民俗学を確立した一人である澁澤敬三は、1924年、スカンセンなどの北欧の野外博物館を見学している。そして、1936年に計画した日本民族博物館の構想のなかで「野外展観」と呼ぶ民家の野外博物館施設を計画する。「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立建議案」に記された野外展観の記述として、「一、地方色ある民屋若干を建設すること／東北、関東、関西、其他島 中より若干を選定すること 一、その一部には民具其他を展観すること」と構想されていることが指摘されている（刈田 2002：65）。そして、澁澤はその具体的なプランを示す「野外部設計俯瞰図」の作成を、大正期から本格的に始まった民家研究初期の成果である『日本の民家』を著した今和次郎に依頼した。今も1930年に澁澤からスカンセンの解説書を手渡され、情報を得てスカンセンなどの北欧の野外民家博物館を見学している。なお今が作成した図は、スカンセンの鳥瞰図と似ていることが指摘されている（横浜市歴史博物館ほか編 2002：120－121）。

3 日本民族博物館の野外展観における生活再現展示の想定

この日本民族博物館の「野外部設計俯瞰図」には、①表門から④宿駅旅舎までの建物が描かれているなかで、入り口付近に、桶屋、陶工、鍛冶屋、車大工、曲木屋を描いていることは、スカンセンにおける町場（Town Quarters）職人工房の配置を見習っていることが示されている。このような配置は飛騨民俗村、千葉県立房総のむらで踏襲され、職人の実演が実現されている。

さて、ここで一つの仮説を提示してみたい。もし、日本民族博物館の野外展観が、今に監修が託されて実現したならば、この図に描かれた野外民家博物館はどのような民俗博物館となったのだろうか。この仮定のもとに、この博物館の民家にはどのような生活が再現されたのかという問い掛けをおこなってみたい。

川添登によると、郷土会、白茅会によって始められた民家研究において「今和次郎の視点は、つねに現在そのもの、つまりありのままの民衆生活そのものに注がれていた」といい、「民家の様式や、その建物が建てられた年代などにとらわれず、むしろ、そうしたさまざまな生活の営みを、もっとも的確に表象している民家をえらびだそうとした」と指摘されている（川添 1982：7-100）。

この視点において俯瞰図のなかの民家で注目されるのは、樵小屋、炭小屋、灰小屋などの簡易な構造の建物を、比較的数量多く描いていることである。「皇紀二千六百年記念日本民族博物館設立議案」のなかの「野外展観」において、「家屋形態ヲトル別棟類」として、「納屋、倉、釜屋、機屋、氷室、鶏小屋、薪小屋、水屋」など多数が記され、各種の小屋を展示する計画があったことがわかる。今が生活感を持った簡易な作業小屋に関心を向けていたことは、彼の調査報告のなかに「山の中の灰小屋」などをとりあげていることから明らかであり、小屋の展示に積極的に取り組んだと推測できよう。そして、このような小屋が戦後の民家研究の積極的な対象からはずされたことが、民家史研究の現在の総括において指摘されている（土本 2005：12）。

農家、民家、家屋の3つの言葉が主屋の民家建築に用いられていることも注目される。家屋が当時の植民地の範囲域の民家建築の場合に使用されている。農家が使用されているのは、近畿平野農家・中国地方農家・西多摩小河内農家・甲州農家・信州農家・東北農家の6棟であり、民家は九州五個荘民家・飛騨白川村大家族民家・二戸郡大家族民家の3棟である。農家には畑や植栽など屋敷まわりの生活環境を描いて農家のくらしを表現する意図がうかがわれる。飛騨白川と二戸郡の民家には「大家族」と記され、特に二戸郡大家族民家は、アチックミュージアム彙報の1939（昭和14）年に出版された『南部二都郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』に報告された大家齊藤家を模していると考えられ、その調査内容に基づく、非血縁の名子が同居した大家族のくらしを展示に表現しようとしたのではないかと考えられる。特に、アチックミュージアムの調査で齊藤家の暮らしを1934（昭和9）年⁽¹³⁾に撮影した写真を今が知っていたならば、なおのことであると思われる。

また、先の設立議案のなかで野外展観において「其一部ニハ民具其他ヲ展観スルコト」との記述がどのような内容を示すのかは未詳であるが、「展観ハ出来得ル限り實際ノ状況ヲ具現スルニ留意スルコト」とする日本民族博物館の展示方針は、野外展観の生活再現展示をつくるうえで有効な指針になったであろうと思われる（刈田 2002：63-65）。今の調査報告である「埼玉県秩父郡浦山村の調査」においては、農家一戸に置かれた生活用具を記録し、家のなかでの配置を図示している。民家一戸に置かれた生活用具を記録し、ありのままの生活にアプローチするこの調査は、考現学において都市の住まいのなかで、さらに実践されることになる（今 1971：215-230）。今はこのようなモノの配置による生活の軌跡を「建築外の建築」と呼んでおり、「實際ノ状況ヲ具現スル」という展示方針に共鳴したと思われる。

戦前の代表的な民家研究者であった今の考える野外民家博物館ならびに、その生活再現展示を想定しようとする私の動機は、戦前の民家研究を反映した野外民家博物館の姿を描くことによって、同じ野外民家博物館であっても戦後の民家研究を反映した野外民家博物館との違いがあった可能性を示してみたいからである。つまり、この仮説によって民家建築史の研究者と民俗学研究者の野外民家博物館をめぐる同床異夢ともいうべき、そこに託された考えの違いを示してみたいのである。

これまで述べてきたことによって、この「野外展観」の民家の生活再現展示を想定するならば、民

家とともにその生活環境を含んだトータルな生活の場と捉えている視点、民家一戸に置かれた生活用具のありのままの姿を表そうとする視点、そこにくらしした家族の姿を表す視点、これらの視点によってつくられ、さらに実演を構想にいていた展示を考えていたと思われる。今が「スウェーデン及ノルウェーの戸外博物館の印象は、あの方法こそ最上のものである」(今 1946:146)と評価するように、スカンセンの理念と実践である、リビングヒストリーミュージアムとしての生きた生活の再現と共鳴するものであったと想定される。澁澤敬三は、滅び行く伝統的な生活を保存し、展示するためには、生活の場である民家の野外博物館が有効だと考えており、彼の認識は、日本民俗学の初志の一つであり、スカンセンを理想として展示をイメージしていたとこれまでに指摘されてきた通りである。

しかし、先に述べた通りにそこには戦後の民家史研究の進展によって、今の民家研究方向性の提示は半ば閉ざされることとなったと考えられる。建築当初に復原された民家を生活史の面からみれば建築当初から移築時までに行われた改築、増築は、生活の容れ物としての民家に住んだ人たちの生活の痕跡に他ならない。復原はそれらを消したことを意味している。この仮説には、民家は生活の容れものであり、そこに多様な生活の表現がなされた生活再現展示の可能性があったと考えられる。

4 民俗博物館としての野外民家博物館の実現

ここまで、実現しなかった野外民家博物館について考えてきたが、次に民俗博物館としての性格を持つと考えられる野外民家博物館を考えたい。その具体例として、生きた伝統的な生活を伝えようと表明した飛騨民俗村と、伝統的な生活を体験することをテーマとした千葉県立房総のむらが、どのようにつくられたのか、どのような生活再現展示が行われているかを考えたい。

〈生きた博物館を目指した飛騨民俗村〉 1959年、ダム建設によって水没する岐阜県荘川村の合掌造りの民家が高山市に移築されて飛騨民俗館となったことが契機となり、その後、飛騨地方各地から特徴ある民家及び附属建造物36棟を収集し、木地師、和紙づくりなどの実演を行う工芸集落10棟を加えて飛騨民俗村と改称して現在に至っている。

この博物館を企画し、初代館長を務めた長倉三朗は、開館当初は展示方法について「従来の博物館の中の運営とは替えることにした。実際に人がそこに住んでいるように、火を焚くこと、水屋に水を引いて、その水を飲み、使えるようにすること、また農事にたずさわった生活を表現するために、生産に使用した民具、生活用具を重点に展示した。チョウダ(婦人の部屋)の長持やタンスには、衣類を入れ、誰でも開いて見られるようにした」と述べている。現在までこの博物館に受け継がれている「生きた博物館(Living Museum)」というコンセプトを表現しようとした試みであったが、3カ月後には防犯上の問題からケース展示を併用することになったという(長倉 1974:15)。

その後、「五穀や野菜を作るための農薬を使わぬ畑を作り、炭を焼き、神社や舞台を作り、民俗芸能を行えるようにする。こうして単なる民家の移築でなく、それを『集落』として形作ってゆく。各家々では、旧部落の年中行事もできるだけ行うよう」にして、民俗村としての構想を実現していった(同前:16)。

飛騨民俗村の民家やその屋敷地について、移築する民家に対して、家の向き、土台、周辺環境を同じ条件で復原すると長倉が述べていることは注目される⁽¹⁴⁾。また、「移築された建物全てが復原されたわけではなく、現状維持とされているものが多い。復原されていないため、当然古材の占める割合が

高く、建物が持つ歴史を古材を通して感じ取ることができる」と肯定的に評価されている(大野 2003: 213)。建築当初に復原することに固執しなかった理由について、長倉自身によるそのことへの言及は確認されていないのだが、生きた博物館というコンセプトから考えると、生活の軌跡である民家の増改築をなくしてしまうことに積極的であったとはおよそ考えられない⁽¹⁵⁾。

飛騨民俗村における伝統的なくらしは、どのような時代を想定しているのかが、明確に記されているものは見つけられていない。しかし、長倉は飛騨民俗村を「一世紀前の村を目標に建設した」と述べているところから、おおまかにいえば、1959年の開館時から考えて前近代の生活に焦点を合わせていると理解される。このような時間軸でくらしをとらえる考えのもとで、あえて厳密な民家の当初復原にこだわらずに、現状維持のままの民家におけるくらしを起点に生活を再現しようとしたのであろう。

〈生活体験博物館 千葉県立房総のむら〉 1986年に開館した千葉県立房総のむら(以下、房総のむらと表記)は、「江戸時代後期から明治時代初期の農家、町並み、武家屋敷など当時の情景を再現し、そこで今に伝わる伝統的な生活技術や習慣、儀礼などを来村者が直接体験して学び、伝統文化を未来へ継承する場」としてつくられた(千葉県立房総のむら 1987: 35)。そして、農家、町並み、武家屋敷を再現しているなかで、上総、下総、安房の三地域、いわゆる三国の農家の主屋を含めた屋敷構えを実際の規模で忠実に復原している。これまでの野外民家博物館において未消化であった屋敷地、耕地、むらの景観が、十分な敷地のなかで表現されている。(写真 2, 3)

これまでの野外博物館とは違った姿を求めた房総のむらにおいて、どのように民家がつくられ、生活再現展示がなされたのか、上総の農家を例に開館準備の記録によって確かめたい(市原 1987: 183-187)。

房総のむらの24棟にのぼる建築物はすべて新規に再現・新築されたものであり、それまでの多くの野外民家博物館が実際の民家を移築保存することを趣旨としていることに対して特異な存在である。



写真2 千葉県立房総のむら 上総の農家の遠景

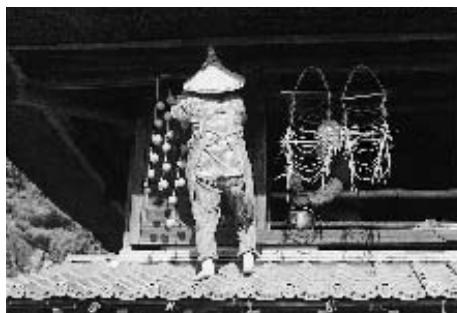


写真3 千葉県立房総のむら 上総の農家の生活再現

この民家建築物をどのようにするのかという方針について、準備段階において次の5つの案「①指定文化財等建造物の新築再現、②指定文化財建造物の移築再現、③指定文化財相当建造物の移築再現、④屋根のみ不燃材を用いて再現、⑤新建材によるセット風新築」が検討された。そして、体験博物館として活動していくために①案が採用された。①案が「建物を使用して本格的な体験学習を展開するため、指定文化財建造物の移築再現ではなく新築再現にならざるを得ない点は止むを得ないこと」と考えられ、他の4案は房総のむらの体験博物館としての基本的な性格と齟齬があると考えられた。上総の農家(主屋)は大網白里町砂田の秋葉家を選定し、屋敷構えは市原市栢橋の内藤家をモデルとし、「屋敷構えとして、7棟をもって構成し、その地方にかかわる樹木などを植栽するほか、一通りの生活用具を備えつけて、くらしの状態を再現した」とされる。この記

述の通り、上総の農家では、屋敷、耕地などの生活環境が十分に復原され、農家内に日常生活の道具が使用している状態に配置されている。

スタッフによって竈で火が焚かれ、畑でとれた作物をそこで調理するなどにより、実生活に近い再現展示がなされている。そして、その生活を通しての展示、体験メニューが用意されている。作物の栽培などの諸作業を観覧者に見せるとともに体験してもらい、その収穫物を調理の実演や体験に使うという仕組みで生きたくらしを展示している。

実際に、千葉県教育委員会の民家調査を主導し、上総の農家をはじめ、房総のむらの民家選定に携わった民家建築史の研究者である大河直躬は、上総の農家に選定された秋葉家住宅が「江戸時代末期にそのような発展の頂上に達した時期に建設されたものである。私たちは、この『上総の農家』を通して、江戸時代末期の上総地方の農民の日常の住まいかたや、あるいは各種の年中行事等における使い方などを、具体的に理解することができる」と記している。

房総のむらでは、江戸時代後期から明治時代初期のくらしを表すことに対して、上総の農家は、近世後期の建築物を「後世に改造された部分は、今回の工事では、部材に残る古い仕口などを手がかりにして、できるだけ建設当初の形式に復原するように努力」したとされる⁽¹⁶⁾（大河 1987：192）。飛騨民俗村においては、多くの現状を維持したままの民家において約一世紀前の生活を再現しようとしたのであり、それぞれの博物館、民家においての生活再現展示のつくる思考がそこにある⁽¹⁷⁾。

飛騨民俗村の生きた博物館というテーマは、基本的に房総のむらは引き継がれている。民俗学研究者が求めた野外民家博物館の理想の一端は、房総のむらによって実現されたと私は考えている。

IV 民家に再現された生活のとき

これまでこの国の野外民家博物館の構想から実現において、戦前から戦後の民家研究の変容が反映されていることを述べた。そして、これらの民家研究の流れを受けて展開した野外民家博物館の生活再現展示がどのようにつくられたのかを確かめた。

次にここではこれらの展示が、どのような年代の「昔のくらし」を表現していたのかを整理し、その意味を考えてみたい。

1 生活再現展示の理想

先述の通りに、飛騨民俗村・房総のむらが標榜した生活感のある生活は、生活再現展示の理想である。このことについて、かつて岩井宏美は「本来そこで人が暮らしたときのありのままの姿を再現すべきで、そこに展示される資料も、生活の必要上使われたものをそのままの姿で置かれるべきである。それでこそ、はじめて暮らしと道具の有機的なつながりを全体像として捉えることができる」と述べた（岩井 1976：19）。

2002年に国立民族学博物館で開催された「2002年ソウルスタイル」展において、韓国のソウルに住む李源台さん一家の持ち物、三千数百点全てを使って、5人家族が住むアパートでの生活をほぼそのままの状態での生活再現展示がなされた（朝倉ほか 2002；2003）。この生活再現展示の理想は、現在の生活をそのままに冷蔵庫にキムチを入れた状態にまで再現したこの展示によって実現されたといえ

る。そう考えると、民家の生活再現展示にとって生きた生活に最も近く展示できるのは、最も多くの調査で得た情報を生かせられる調査時点においての生活なのであろう。はじめに述べた小学生向けの「昔の暮らし」展示が、子どもたちの身近な大人たちに聞き取れる範囲の時代として、戦前の暮らしを設定していることは、聞き取り調査からさかのぼれる範囲の暮らしが年代的に限定されることと同じである。

現状と聞き取り調査でさかのぼれた話者の記憶の及ぶ時期は、50年が目安、最長でも6、70年程であらうか。生活再現展示の時期の設定について、杉本は「明治・大正期なら生活復原の可能性が大きい、江戸時代ともなると、現存資料からその時代や地域の生活の雰囲気づくりに努力するという形をとることになる場合が多い」と述べている（杉本 2002：318）。この指摘の通り、生活を再現する時代が遡るほどに、調査ではつかめない想像する部分が増えていくと考えられる。岩井の「暮らしのありのまま」の暮らしを展示するという理想は、現実には調査時点での生活においてはじめて可能であることは自明であらう。野外民家博物館において生き生きとした生活再現展示の理想を実現するためには、展示する民家の実際の暮らしを調査した時点から近い年代の暮らしにするほどその理想に近づき、再現する時間が離れるほど理想から遠ざかることになるのだろう。

2 民俗展示としての生活再現展示

先の飛騨民俗村が再現する生活は「およそ1世紀前」、房総のむらが再現する生活は「江戸時代後期から明治時代初期」を想定している。つまり、この2つの野外民家博物館は観覧者に伝えたい生活として、近代に入る前（前近代）というような大まかな年代の幅のなかで、近代化されていない暮らしが営まれたときという相対的な時間が想定されている。21世紀の現在からみれば、この時代設定は生きた生活を展示表現するとしてはいかにも遠い年代なのだが、これらの博物館にとっての伝えるべき暮らしとは、その困難を乗り越えてでも前近代の生活なのである。伝統的な暮らしを調査資料に基づいてかろうじて展示できる最も近い年代として、2つの博物館の各年代が設定されていると考えられる。

先のフリーランドムセーを見た河岡の「民俗博物館のあるべき姿はこれだ」という発言は、滅びゆく伝統的な生活を保存し、展示するためには、生活の場である民家の野外博物館が有効だと考えた澁澤敬三の認識に共鳴するものである。民俗学研究者による民家の生活再現展示を民俗展示ととらえた言説は、おそらく前近代の生活を表す展示を想定したのだろうと思う。

とすると、この年代への距離感は、この国で野外民俗博物館が構想された時点から現在までの間に徐々に遠ざかっていることを認識しておかなければならない。そして、ここで考えていかなければならないのは、伝統的な暮らしから読み取られることは、そこで生活する人の行動なのだということである。調査対象である生活を展示として再現することで、生活調査から読み取ったこと、人の行動、例えば囲炉裏の坐順などを表現しているのである。生活再現展示は、その暮らしにおける人の行動を内示することを起点としている。すると、先の2つの博物館は、伝えるべき暮らしにおける人の行為の時間軸を前近代に求めているといえる。そして、人の行為を表現する民俗展示としての理想が、生活再現展示によって実現されるという見通しを、民俗学研究者は持っていたと考えられる。

3 歴史展示としての生活再現展示

それでは、野外民家博物館に移築され、近世のいずれかの時期に復原されている多くの民家では、どの時期の生活が再現されているのだろうか。先に述べた通りに、移築民家の暮らしを調査した時点と、生活再現に求められる年代との時間差が非常に大きくなると、生活を再現する情報が少なくなってしまうと考えられる。小坂は建築当初に復原した民家において、間取りなどが大幅に変更する事態となった場合、収集した民具が展示できなくなることを指摘している。このような厳しい条件のなかで、生活を再現する際、近世の建物に復原された民家には、近世の民具を展示すべきで近代の民具を展示すべきでないという考えを持ってのぞんだという。

近世にさかのぼる民家の民具収集について考えると、近代以降につくられた民具が多いなか近世に使われた民具は少数である場合がほとんどであると考えられる。近世の民具は使われ続けているのではなく、しまわれていることによって保存されてきたものである場合が多いのであろう。そのような様々な使用状況、保存状況のなかで収集した民具をどのように展示するかを考えたとき、前述の通り、小坂によると、日本民家園では近世の建築物に復原された民家に、近世に使われたと考えられる、あるいは同じ型のものに限った民具を、近世の生活資料として展示してきたとされる。その言葉には、近世の民家に近代の民具を生活資料として展示している民家の展示例があることへの違和感を背景にしていることを認識すべきだろう。

〈民俗展示から歴史展示へと変更された民家の生活再現展示〉 この近世の生活資料としての民具というとらえ方について興味深い状況を示すのが、埼玉県立博物館（現 埼玉県立歴史と民俗の博物館）⁽¹⁸⁾における常設展示室の「埼玉の風土と生活」と名づけられた民俗展示内の民家の生活再現展示である。この民俗展示は「水田稲作地帯・丘陵部の畑作地帯・山間部の林業養蚕地帯の3グループを設定し、それぞれの特徴的な生業民具を選択し展示構成したもの」（村上 1992：140）であり、この展示の中心となった民家は「宝暦3年（1753）銘をもつ高麗・入間地方に見られる典型的な農家を移築し、光と音で農家の一日の暮らしを再現」していた（埼玉県立博物館 1982：1）。

1971年の開館当初は、「江戸時代後期以降の常民生活」―近代を含んだ相対的な年代の幅の中の一―を表現する民俗展示を、歴史展示の一環として位置付けられた歴史展示室Ⅲとして構成していた。「民俗資料は民衆生活史の遺産であると考え歴史展示の一部として取り扱っていたが、実態としては歴史展示との脈絡に欠けるところがあり、民俗展示室として独立している面があった」（埼玉県立博物館 1991：7）と評価されて、1983年の歴史系総合博物館への性格の変更に伴って庶民の具体的な生活史を表現した独立した展示室であった歴史展示室Ⅲ、民俗展示室は、近世史の展示である「江戸をささえるⅡ―産業と文化―」に展示替えすることになった。

この展示室の特徴について、「明治時代以降に使用されてきた民俗資料を多量に活用したことであり、明治時代以降の民俗資料の活用については、各種の近世文書をひもとき、そこに挙げられている庶民の生活風景、民具の絵図を参照した。即ち、近世文書と民俗資料を対応させ、形態・材料等に同質性を確認できた物については、明治時代以降に用いられた民俗資料でも近世の庶民生活の再現展示に活用できると判断している。この室では展示資料の時代を江戸時代後期に設定している」とされる（同前 1982：50）。

この変更された展示と先の近世の民家に近世の民具を展示するという考えはともに、近世の生活資

料として民具を位置付けるという考えによってつくれている。この考えに影響を与えた要因のひとつは、民家の建築当初復原における制限によるものであり、もう1つは民俗展示が「歴史展示との脈絡に欠けるところがあり」と評価されて歴史展示に吸収されるという事態によるものであった。

4 生活再現展示をつくる思考へ

埼玉県立博物館における民家の生活再現展示の所属変更は、民俗展示という独自の展示表現が、歴史展示に組み込まれていく問題として考えなければならない。歴史展示における民俗資料による展示表現という展示構成のあり方は、近代史展示に組み込むことを含めて、展示をつくるうえでの民俗学と生活文化史の対象領域の重なりという研究状況の反映とも考えることができよう。

その一方で、繰り返されてきたくらしの営みを忘れないために表現したはずだった民俗展示としての生活再現展示が、皮肉なことに近代化されていないくらしに全くといっていいほど、生活経験を持たない人々が増加していくことによって、現実感がないものとなっていく事態を迎えていると私は考えている。例えば、30年前に野外民家博物館に訪れた人々と、現在訪れている人々では、その生活経験の違いから再現されているくらしへの現実感は確実に違っている。

歴史展示に取り込まれた民俗資料の展示のあり方も、それが拠って建つ場所を、近世や近代という歴史の一局面に求めたと考えることもできる。いずれにしても、未だ推測にすぎないのだが、ノスタルジアの対象となった戦後生活を再現した展示が増加していることと連動した事態としてとらえる視点も考えられよう。

以上の民家の生活再現展示をめぐるなされてきた様々な思考は、いわば展示の歴史として記述していくことが必要である。その歴史を現在に位置付けるためには、昭和30年代を中心にしたくらしを展示している戦後生活再現展示との関係を考えることが必要である。民家の生活再現展示と戦後生活再現展示とは、様々な面に対照的である。これらの違いはどのように生じてきたのか、生活再現展示の変遷・歴史的経緯のなかでの、民家の生活再現展示から戦後生活再現展示への変遷を位置付ける作業を通して、生活再現展示の特性を明らかにできるだろう。

そして、原点に戻って展示をどのようにするのか考えることも必要である。現在の民家建築史研究においては、民家の復原年代の中古復原も含めた幅広い選択や、屋敷地を含めた民家の生活環境の再評価の視点によって民家をつくる可能性を持っていると考えられる。そのことを前提にして、民家の生活再現展示をどのようにつくりたいかを見通すためには、この民家に住んだ人々の姿を明確にイメージできる生活を表す必要がある。

これは、実際に住んだ人々の姿を写真などで展示するといった手段でなく、家族の日本的形態である「家」を、民家の生活再現展示を通して表現することである。いうまでもなく「家」は住まいである家屋であるとともに、そこに住む人々の集団を示している。その意味で建築物である民家はそこに住む家族の容れ物であり、そこに展開される生活はその家族の日常的な行動の軌跡である。民家と生活は、そこに住んだ人々の存在を通して不可分な関係にあることを前提に、民家の生活再現展示をもう一度考えたい。

付記

近年の行政効率化に伴う公立博物館への指定管理者制度の導入などによって、博物館資料の保存、博物館の存続が危ぶまれているなかで求められていることは、博物館活動と実社会との実りある関係の構築である。例えば、この文で取り上げた民家の保存・活用を取り巻く近年の状況においては、野外博物館への移築よりも、住み継ぎネットワークや、地域コミュニティの拠点としての利用など現実の民家を社会的に開いていこうとする活動の方に注目が集まっている。そのようななかで、この思考は民家の展示を、調査研究のなかに閉じていくことなのだろうか。この思考に耳を傾ける人がいるだろうか。しかし、世間に博物館を開いていくにあたって、展示に込めた歴史の豊かさへのこのこだわりを捨てたら、博物館に何の価値があるのだろうか、と思う。

最後に、この文の作成にあたって、小坂宏志氏をはじめ、多くの方々の助言、川崎市立日本民家園、千葉県立房総のむら（写真掲載）など多くの博物館の協力を受けたことを感謝する。なお、文中の敬称は略している。

註

- (1) 生活再現展示の手法は「ICOM（国際博物館会議）の初代ディレクターであった博物館学者G. H. リビエール」によって、「建築物およびそこに展開される生活を、切り取られ展示ケースに入れられた「モノ」ではなく、環境全体で構成するスカンセンの手法を、パリのA.T.P.（国立民衆芸術と伝統の博物館）の前進である「フランス民衆芸術の博物館」における展示で試み」られた（大原 1999）とされる。この文では、「ふくげん」には、「復原」を使用し、「復元」は引用箇所において使用して入る場合に限りて使用する。また、「おもや」には、「主屋」を使用し、「母家」は引用箇所において使用して入る場合に限りて使用する。
- (2) 野外民家博物館を「収集展示型人文系野外博物館」のうち建築物を収集展示している施設と定義している（早川他 2000）。この文では、これまで民家野外博物館と記されてきたことが多かったことに対して、野外民家博物館と記すことにしたい。その理由は、野外博物館の一形態として民家の博物館が存在していることから、民家に対して野外を先に記した方がと妥当であると考えたからである。
- (3) 杉本尚次の野外民家博物館の展示方法についての研究（杉本 2002）と生活再現展示との関係を検討してみたい。杉本は、野外民家博物館の展示を、立地環境・移築復元した建築物（主として伝統的な民家）・建物内外の民具など生活用具類の展示・生活の再現 農耕や手工業などの実演展示・展示館の5つに分けて考えている。この文の生活再現展示に当たるのは、「建物内外の民具など生活用具類の展示」と「生活の再現 農耕や手工業などの実演展示」だと考えられる。たとえば、「建物内外の民具など生活用具類の展示」とは、竈周辺の火消し壺や、火吹き竹などの民具を配置すること自体が、それらを使って竈で火を焚くことの生活を伝えようとしている展示であり、「生活の再現 農耕や手工業などの実演展示」とは、実際に竈で火吹き竹を使って飯を炊くなどの実演を示している。なお、実演展示において民家の生活とは直接に関係のない職人の実演などは、野外民家博物館における生活の再現ととらえることができるが、この文において直接に検討する対象ではない。
- (4) 早川典子は「この「野外民家博物館」の定義にあてはまる施設は49施設である」としている（早川他 2000）。大野敏は「古民家（主屋）を複数棟収集して展示公開している施設を古民家野外博物館と定義する」（大野 2003：47～49）とし、その数を43館としている。この古民家野外博物館には、後述の民家を新築復原した千葉県立房総のむらは含まれていない。
- (5) 明治村や北海道開拓の村などにおける、近代化に関する歴史的建造物等の民家以外の建造物は、この文の対象とはしていない。ただし、江戸東京たてもの園などの近代住宅などはこの文で直接に言及しないが、生活再現展示を展示表現する博物館資料として研究の射程にとらえている。
- (6) ここに記した民家史研究における戦前の民家研究の否定的見解の表明は、現在の民家史研究の総括において、その問題点が指摘されている（土本 2005：3）。
- (7) 大野敏による古民家野外博物館該当施設43館へのアンケート調査（回答41館）によると、「建物の復元年代」の質問に対して「原則として」などの条件付きを含めて、約4分の3にあたる31館が建築当初に復元してい

- ると回答していることが表記されている（大野 2001：52-53）。
- (8)「建物は、建築学会や新聞社等からの情報（現地保存不可能な民家についての）に基づき、古江亮仁氏と大岡実博士が現地調査を行い、移築保存する価値を確認した上で決定したものがほとんどである。移築された建物は、文化庁や建築史学者の指導のもと、文化財建造物保存の専門職の設計監理により、原則として建築当初の姿に復原修理されている」とある（大野 2001：59）。ただし、日本民家園の民家のなかでも、旧佐々木家住宅（長野県南佐久郡八千穂村）は、建築時と考えられる享保16（1731）年ではなく、延享4（1774）年に座敷を増築した姿に復原している（川崎市立日本民家園 2004）。
- (9) 民家の生活再現展示が設立趣旨に記されていないことに対して、「その理由は、民家の移築・復元・保存が第一次的な事業であったため、そこまで考慮するゆとりがなかったこと、また、民家への民具の展示方法が具体的に把握できなかったため、民具展示の期待を、むしろ将来建てることのできるであろう資料館に重点を置きすぎたことなどがあげられる」と記している（小坂 1974：3）。
- (10) 2006年11月に小坂広志氏から日本民家園の学芸員であった当時の実務の話をうかがった。民家の移築・復原・保存にあたっては、文化財保存協会からの派遣職員2名が担当したという。
- (11) 資料館の展示方法を「その民具展示は、民家という建造物を雰囲氣的・背景的な効果手段として利用している面が多く、雰囲氣的・背景的な効果を除けば、資料館という建物の中でも、その役割は十分に果たせるという民具展示法」と説明している（小坂 1974：2）。
- (12)『日本民俗学』106号（1976年）の民俗博物館特集において、田原久は「民俗博物館構想」のなかで主屋だけを優先にした当時の野外民家博物館の状況を批判している。
- (13) 有賀喜左衛門はこれらの写真を、有賀喜左衛門著作集3巻『大家族制度と名子制度』を編集したおりにあらたに掲載し、その見取り図を添付している（有賀 1967）。
- (14)「飛騨の里誕生物語」によると「建設構想に全権を与えられた長倉には、かねてより温めていたプランがあった。移築される民家は、家の向き、土台、周辺の環境をかつて建てられていたのと同じ条件で復元されること」と記されている。民家の生活環境を重視することは、当時の野外民家博物館が主屋の保存を最優先にしていたのとは対照的である。
- （飛騨民俗村 2006 公式ホームページ <http://www.hida.jp/hidanosato/hdststry/hdsstrymain1.html>）
- (15) ただし、飛騨民俗村でも2棟の移築民家（国指定重要建造物）を建築当初に復原していることが記されている。このことは、文化財指定との関係が指摘されている（大野 2003：214）。
- (16) この上総の農家のモデルとなった秋葉家住宅は、「安政四丁巳年十一月吉辰」と記された棟札があり、その建築様式からも安政4年に新築されたものと考えられている（大川 1987：192）。この他の下総地方の農家は、「江戸時代中期の建築である成田市堀之内の平山信家住宅を伝統的な工法で再現した」とされる（千葉県立房総のむら1993：29）。安房地方の農家は、「江戸時代後期の建築である三芳村増間地区の平野備家を伝統的な工法で再現した」とされる（同前：42）。
- (17) 大野敏の「古民家展示の方法に関する考察」に掲載された「スカンセンの建物一覧」によると基本的に建物の建築年代を表記し、その建築当初の状態に復原し、増築を表現した場合にはそのことを記している。また、なかには再現した生活の年代を表記している例もある（大野 2001：67-68）。
- (18) はじめての民俗展示であったと考えられる、1967年開館の神奈川県立博物館（現 神奈川県立歴史博物館）の民俗展示室に設けられた民家において、ニワトリの鳴き声によって夜が明けて、また日が沈むという演出がなされたという。その後、埼玉県立博物館を経て、各地の歴史系博物館の展示に広まっていき、さらに江東区江戸深川資料館、大阪市立住まいのミュージアムなどの、町並みを表現した博物館にも普及していったとみられる。この展示室内の民家の展示は別に考えなければならない。

参考文献

朝倉敏夫・佐藤浩司

2002『2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔のくらし』 大阪：国立民族学博物館。

朝倉敏夫・林史樹・金香来

2003『2002年ソウルスタイル』 国立民族学博物館調査報告 44号 大阪：国立民族学博物館。

有賀喜左衛門

1967『大家族制度と名子制度』有賀喜左衛門著作集3巻 東京：未来社。

市原正夫

1987「千葉県立房総のむらの建設をかえりみて—その経過と設立の意義について—」『千葉県立房総のむら年報』1号.

岩井宏美

1976「地方民俗博物館の問題点」『日本民俗学』106号.

大河直躬

1966「〈総論〉現在の民家研究の方向」『建築雑誌』963号 特集日本の民家.

1987「上総の農家」について」『千葉県立房総のむら年報』1号.

太田博太郎

1966「戦後における民家史研究の発展」『信濃』18巻8号.

大野敏

2001「古民家展示の方法に関する考察」(4.1, 4.2, 2(1))『古民家の保存・活用のための方法論的研究—古民家の地域内保全と民家展示施設の考察—』著者代表 大原一興 東京:財団法人住宅総合研究財団.

2003「民家研究・保存史概観」『木造建造物の保存修理のあり方と手法』奈良:奈良文化財研究所.

2005「民家野外博物館の歴史と現状を俯瞰して」『住宅 特集住まいの記憶と継承』54号 東京:社団法人日本住宅協会.

大原一興

1999「スカンセンから新しい博物館学へ」『これからの野外博物館—その役割と可能性—』日本建築学会関東支部歴史意匠専門研究委員会.

刈田均

2002「日本民族博物館の設立に向けた動きとその経過について」『横浜市歴史博物館紀要』7号 横浜:横浜市歴史博物館.

川崎市立日本民家園

1993『川崎市立日本民家園』(ガイドブック).

2004「重要文化財 旧佐々木家のしおり」『民家園解説シリーズNo.1~25』.

川添登

1982「今和次郎の学問 民家論」『生活学の提唱』東京:ドメス出版.

1989 今和次郎「『日本民家』再考—藤森照信氏の『解説』批判」『生活学1990』第15冊 東京:日本生活学会.

小坂広志

1972「古民家の移築にともなう民具収集の諸問題」『神奈川県博物館協会会報』27号.

1974「民家博物館における民具の展示方法について—日本民家園の例—」『民具マンスリー』7巻4号.

今和次郎

1946『草屋根』東京:乾元社.

1971『民家論』(今和次郎著作集3巻) 東京:ドメス出版.

埼玉県立博物館

1982『埼玉県立博物館展示解説 民俗』.

1991『埼玉県立博物館 展示等改善事業の記録とその後のあゆみ』.

杉本尚次

1980「ヨーロッパ民家の民族学的・地理学的研究—野外博物館の民家を中心として—」『国立民族学博物館研究報告』5巻2号.

2002「野外民家博物館の100年—民家の生活復元展示をめぐる—」『住まいの100年』生活学26冊 東京:日本生活学会.

竹内芳太郎

1976「民家非建造物私観」『民俗建築』72号.

千葉県立房総のむら

1987『千葉県立房総のむら年報』1号.

1993『千葉県立房総のむら年報』7号.

土本俊和

2005「民家史研究の総括と展望—棟持柱祖型論に即して—」『民家研究50年の軌跡と民家再生の課題』主題解

- 説 1 日本建築学会建築歴史・意匠委員会民家小委員会編.
坪井洋文・杉本尚次・河岡武春
1974「ヨーロッパの民俗・民族博物館」『民具マンスリー』 6巻10, 11号.
鳥越憲三郎
1974「日本民家集落博物館の開設と経緯」『民具マンスリー 特集日本の野外博物館』 7巻1号.
長倉三朗
1974「飛騨民俗村」『民具マンスリー 特集日本の野外博物館』 7巻1号.
長野県教育委員会
1962『秋山郷の民家』 長野県民俗資料調査報告.
早川典子 片桐正夫
2000「日本の建築収集展示施設に関する基礎的研究—民家野外博物館の分類を中心に—」『日本建築学会大会
学術講演梗概集』日本建築学会.
飛騨民俗村
2006 飛騨民俗村ホームページ (<http://www.hida.jp/hidanosato/hdststry/hdsstrymain1.html>)
古江亮仁
1974「日本民家園について」『民具マンスリー 特集日本の野外博物館』 7巻1号.
丸山泰明
2006「民俗展示の史的展開 国立民俗博物館計画史における野外博物館構想の系譜」『近代日本における宗教
とナショナリズム・国家をめぐる総合的研究』 科学研究費補助金研究成果報告書 川村邦光(研究代表者)
大阪：大阪大学大学院文学研究科日本学研究室.
村上義彦
1992『博物館の歴史展示の実際』 東京：雄山閣出版.
横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編
2002『屋根裏の博物館—実業家澁澤敬三が育てた民の学問』 横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史
財団.